プラセンタは赤ちゃんからのプレゼント ——プラセンタに対する誤解を解く

響きの杜クリニック 院長 西谷 雅史

座長:山本医院 院長 山本 俊昭

はじめに

プラセンタ療法が近年、ますます注目されていることは間違いない。演者は日々の臨床の中で「びっくりするほど効果があった」「劇的に効いた」などという、通常の臨床では聞くことのない患者さんの言葉を聞いている。これは実際にプラセンタ治療を行っている医師であれば、誰もが経験済みのことであろう。

だが一方では、プラセンタに対して安全性に不安をもち、使用に 懐疑的な医師がいることも事実で、「Doctors Community」(m3.com) を覗くと、こんな書き込みにも出会う。

「エビデンスの全くない、しかも機序の説明がつかない、昔作られたくだらないプラセンタなんて、即刻、発売中止にすべきです」

「プラセンタを使うことは無意味に献血不適格者を増やすことになるのです。患者さんを献血できない体にしてしまって、罪悪感を感じませんか? そもそも、献血できないってことをどのようにご説明されていますか。献血できない理由、そこにこの製剤の危険性があります。そして、それをきちんと説明する必要があります」

まずは疑ってかかることが科学の基本である以上、このような誤解が生じてもやむを得ないが、現在、臨床でプラセンタを使っている医師が肩身の狭い思いをしたり、これから使おうとしている医師が萎縮してしまうことは避けたいものである。

そこで今回はこれらの誤解を解くことで、すべての医師がプラセンタに前向きに取り組めるようになればと願ってている。また、プラセンタの作用機序に対する私見も披露したいと考えている。

それではまず、基本的な事柄の確認から始めることにしたい。



略歴:

1956 年、東京生まれ。北海道大学医学部 卒業

人間の自己治癒能力に働きかける代替医療を現代医療に取り入れた統合医療を行うクリニックを 2006 年 10 月に開院し、気功・バッチフラワー・ホメオパシー・温熱療法などを行っている

資格など:

医学博士、日本産科婦人科学会専門医、日本東洋医学会専門医、日本胎盤臨床医学会 (理事)、西野塾札幌同好会代表、日本アントロポゾフィー医学のための医師会会員

誤解を解くための基礎的な事柄

特定生物由来製品とは何か

プラセンタ製剤は厚生労働省によって「特定生物 由来製品 | とされているので、その概念をスライド に示した (図1)。

すなわち「医薬品」の中で、人その他の生物(植 物を除く)の細胞、組織等に由来する原料または材 料を用いた製品のうち、保健衛生上特別の注意を要 するものを「生物由来製品」といい、次のような特 徴があることが同省のホームページには記されて いる。

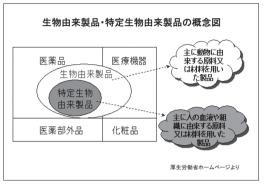


図 1

特定生物由来製品

厚生労働省ホームページより

<主な特徴>

- 1. 未知の感染性因子を含有している可能性が否定できない場 合がある。
- 2. 不特定多数の人や動物から採取されている場合、感染因子 混入のリスクが高い。
- 3. 感染因子の不活化処理等に限界がある場合がある。

そして、生物由来製品 の中でも「血液製剤や、 人組織由来の医薬品」を 含む特定生物由来製品は危 険性が高いとされ、医療機 関や薬局における必要事項 として「感染症状の報告が 必要しなどの記載のほか、 医療機関に対しては使用時 における患者への適切な説 明、使用記録の作成と保管 などが定められている(図2、図3)。

注意を喚起されている「特定生物由来製 品 にどんな安全確保対策が求められている かの概要も同省のホームページにあるので、 その資料を要約してご紹介しておく(図4)。

生物由来製品 例えば ・ ワクチン、トキソイド 遺伝子組換え製剤 動物成分抽出製剤 動物由来心臓弁等があります。 医療機関・薬局においては → 製品に由来すると疑われる感染症等が発生した場合には、 厚生労働省への報告が必要です 厚生労働省ホームページより

(1)患者への適切な説明 (2)使用記録の作成、保管 (3)感染症等情報の報告 が必要です。 図3 図 2

何(え)ゴ

人血清アルブミン 人免疫グロブリン などの血液製剤

医療機関・薬局 においては

人胎盤抽出物
 等があります。

プラセンタエキス注射製剤の製法

視点を変えて、プラセンタ注射薬がどのよ うに製造され、どんな特徴があるかを見てお きたい。

次ページの図5は、わが国の2種類の注

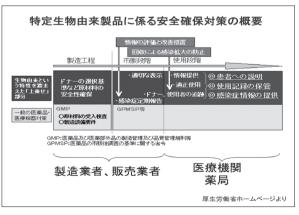


図 4

射薬「ラエンネック」と「メルスモン」 の製造法について、両メーカーが公表 している資料(一部改変)を比較した ものである。

製法に関しての両者の大きな違いは、メルスモンが塩酸による「加水分解」によって低分子の蛋白質を含め全てがアミノ酸に変わるのに対し、ラエンネックは最初の段階で上澄みの一部を取り分けておき、それ以外の材料を加水分解したところへ、取り分けておいた上澄み液を加えるという方法をとっている。上澄み液にはサイトカインなどを含む低分子の蛋白質が含まれていると考えられ、その内容が製品に反映されることになる。

メルスモンもラエンネックも最終段 階で高圧滅菌処理をすることは同じだ が、製造工程の違いによって成分などが違っ てくると考えられるので、それをピックアッ プして図6に示した。

- ③の「総窒素量」は、メルスモンは「社外 秘」で公表されていない。
- ④は製法の違いによりラエンネックには「アミノ酸・ペプチド・蛋白」が含有されるが、 メルスモンには「蛋白」は含まれていない。

さらに製品の成分に関して、ラエンネックではゲルクロマトグラムの検査結果(図7)を公表しているが、蛋白の存在が明らかである。

蛋白といえば「プリオン蛋白」の存在を気 にする向きもあろう。

病原性プリオンは、非病原性プリオンと一次構造 (アミノ酸配列) に大きな差はなく、アミノ酸数で 250個程度、分子量で35kDa程度である。

二次構造と呼ばれる立体構造に大きな違いがある ため、体内での挙動が異なる。病原性プリオンは 水に不溶性であり、非病原性プリオンは水に可溶性である。

プラセンタ注射薬は、蛋白を含まないか、水溶性の低分子蛋白の みを含む工程で製造されるため、スクリーニングと合わせて現実的 に安全であると考えられる。

「ラエンネック」と「メルスモン」の製法の違い

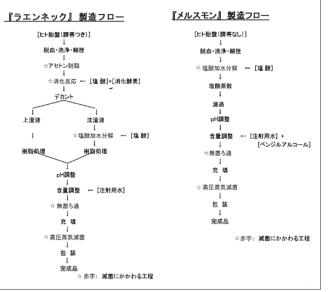


図 5

プラセンタエキス注射製剤の特徴

「ラエンネック」製法の特徴

①臍帯及び羊膜付き胎盤を使用.

②消化酵素を用いて消化反応する (ホルモンを前駆体に代謝する ため).

消化反応液の「上澄液」に 「沈渣の塩酸加水分解液」を 混和する.

③最終製品の総窒素量: 約 0.80 w/v%

④アミノ酸・ペプチド・たん白 含有

⑤無添加

「メルスモン」製法の特徴

- ①臍帯及び羊膜を除いた胎盤を 使用.
- ②たん白反応がなくなるまで塩酸 加水分解する.

③最終製品の総窒素量:

w/v%

④アミノ酸・ペプチド 含有 (たん白は含まない)

⑤ベンジルアルコール添加

図 6

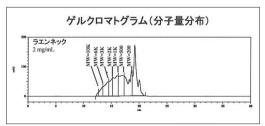


図 7

「vCJD感染のリスクが高い」という誤解

この誤解は「献血ができなくなるほど危険」という誤解に通ずるのだが、vCJD(変異型クロイツフェルト・ヤコブ病)のリスクが問題視される前提となったのが、「狂牛病」とも呼ばれた「牛海綿状脳症(BSE)」である。

[牛海綿状脳症(BSE)]

これは牛の病気の一つで、牛がBSEプリオンと呼ばれる病原体に 感染すると脳の組織がスポンジ状になり、異常行動、運動失調など を示して死亡するとされている。

かつて英国などを中心に、BSE感染牛の脳や脊髄などを原料とした餌を他の牛に与えたことが原因で牛へのBSEの感染が広がり、日本でも2001(平成13)年9月から2009(平成21)年1月までの間に36頭の感染牛が発見された。

そこで日本や海外で「牛の脳や脊髄などの組織を家畜の餌に混ぜない」との規制が行われた結果、BSEの発生は世界で約3万7千頭

(1992年:発生のピーク)から7頭(2013年)へと激減し、日本では2003(平成15)年以降に出生した生からはBSEは確

認されていない。 念のために、感染の危険性のある牛

念のために、感染の危険性のある牛の特定部位を図示した(図8)。現在はこれら危険部位は全て廃棄され、流通していない。ここで知っておいてほしいことの一つは、腹部の感染源は回腸(小腸末端部の約2m)であって、胎盤は含まれていないことである。

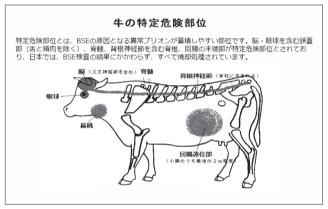


図8

[vCJD(変異型クロイツフェルト・ヤコブ病)]

人が罹患すると抑鬱、不安などの精神症状を経て数年で死亡する 難病で、原因は牛海綿状脳症(BSE)に由来する「感染性を有する異 常プリオン蛋白」とされ、感染経路としてBSE牛の経口摂取や、潜 伏期間にあるvCJD感染者の血液による輸血等が考えられている。 英国をはじめとするヨーロッパ諸国を中心に、208例(2008年7月現 在)が報告されている。

BSEの原因といわれる肉骨粉が英国で使用され始めた時期が1980年で、牛の危険部位の流通規制が徹底されたのが1996年であることから、1980年から1996年までの英国は、vCJDに感染するリスクが相対的に高い時期にあった、と考えられる。

我が国では 2005 (平成 17) 年2月に国内第1例となる患者が確認されて以降は新たなvCJD患者は確認されておらず、また、これ

まで170例の確定または疑い例が確認されて いる英国においても、2008 (平成20)年に1 例、2009 (平成21) 年に2例が確認されたの みで、すでに発生のピークは過ぎたと考えら れている。理論上、2007 (平成19) 年まで に我が国で発生する「英国滞在由来のvCID 患者」は0.06人と推計され、2005(平成17) 年に1名(英国滞在歴あり)が確認されたこ とを踏まえると、今後もう1名の患者が発生 する可能性は極めて低く、また、献血に起因 するvCID の感染拡大リスクも極めて小さい と考えられる。

厚生労働省が発表した海外渡航・居住に関 わる「献血制限」の資料を参考までに示した (図9)。英国だけでなく、その他38ヵ国の滞

在歴のある者にも献血制限が実施されている。2010(平成 22) 年1月までは英国滞在歴が1日以上の旅行者も献血を制限 されていたが、2010年1月27日より「滞在歴が通算1ヵ月以上 の滞在者」に変更され、その他の国でも制限が緩和された。 あくまでこれは予防的措置であるので、今後も見直される ことが想定されている。

「献血ができなくなるほど危険だ」という誤解

この献血制限は、巡り巡って「ヒト胎盤」からつくられる プラセンタ注射にまで影響を及ぼすことになるのだが、実際 面でこの規制を「日赤による献血活動」にどう反映させるか。
 が厚生労働省で検討されたとき、通達の「案」として提示さ れたのが右の書面(図10)である。

ここには「プラセンタの注射薬 も、理論上のリスクが否定できな いため、vCIDの感染の恐れがな いとは言えない」ので、過去にプ ラセンタ注射をしたことのある人 は「献血をご遠慮ください」と記 されている。

この文案の根拠となった文書 (安全技術審査会:平成17年12月) を示した(図11)。ここには「献 血制限の理由 | が記されているの であるが、要約すると次のように なる。

■ 05 英国以外の国での滞在歴について、献血制限はないのですか。

ヒトでのvCJD及び牛での牛海綿状脳症(BSE)の発生状況等を踏まえ、英国に加え、以下の表に掲げる外 国滞在歴を有する方からの献血制限を実施しております。

		滞在国	通算滞在歷	滞在時期
A	(1)	英国	1か月以上〜 (1996年 まで) 6か月以上〜 (1997年 から)	1980年~2004年
	(2)	アイルランド、イタリア、オランダ、スペイン、ドイ ツ、フランス、ベルギー、ポルトガル、サウジアラピ ア	6か月以上	
	(3)	スイス	6か月以上	1980年~
	(1)	オーストリア、ギリシャ、スウェーデン、デンマー ク、フィンランド、ルクセンブルグ	5年以上	1980年~
В	(2)	アイスランド、アルビニア、アンドラ、クロアチア、 サンマリノ、スロバキア、スロベニア、セルビア、モ ンテネグロ、チェコ、バデカン、ハンガリー、ブルガ リア、ボーランド、ポスニア・ヘルツェゴビナ、マケ ドニア、マルタ、モナコ、ノルウェー、リヒテンシュ タイン、ルーマニア	5年以上	1980年~

(厚生労働省のホームページより)

図 9

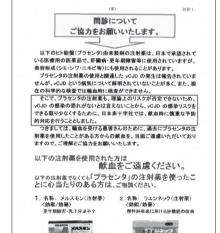
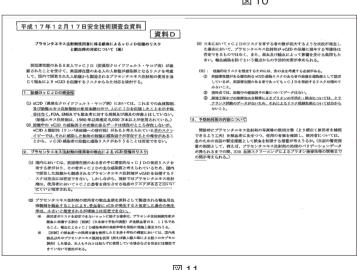


図 10



<プラセンタエキス注射剤の献血制限の理由 >

- ・これまでプラセンタエキス注射剤から vCJD が伝播した報告はない。
- ・ただ、羊のスクレイピー(プリオン病)で胎盤に感染因子が存在 するとの報告がある(胎盤は、BSEでは特定感染部位には含まれ ていない)。
- ・国内にも(英国滞在中に、BSE 牛の経口摂取や潜伏期間にある vCJD 感染者から輸血を受けた)潜在的な vCJD 感染リスクをも つ者がいるため、(その者の) 胎盤から製造されたプラセンタエ キス注射剤が vCIDを伝播するリスクは完全には否定できない。
- ・だが、プラセンタエキス注射剤使用者自身が vCJDを発症するリスクがあるとは言い難い。
- ・一方、プラセンタエキス注射剤使用者からの受血者にvCJDが発生 すると仮定した場合の発生率は、小さいが理論上否定できない。

「プラセンタエキス注射剤を受けている者がvCJDを発症するリスクがあるとは言い難い」状況で、その者からの「受血者にvCJDが発生すると仮定する」ことに少し違和感があるが、いずれにしてもその「発生率」は「小さいが理論上否定できない」程度のものと言える。では、そのリスクは具体的にどれくらいなのだろうか。

一つわかるのは、「潜在的なvCJD感染リスクをもつ者」からの輸血による感染リスクと、「潜在的なvCJD感染リスクをもつ者の胎盤から製造されたプラセンタエキス注射剤を受けた者」からの輸血による感染リスクを比較した場合、後者のリスクは間接的なものとなり、前者より低くなることはあっても高くなることはないということである。つまりそのリスクは、英国などの海外渡航歴のある者より低いと考えてよいのではなかろうか。この点を演者は強調しておきたい。

もちろん胎盤の提供者は、HBV、HCV、HIVが陰性の日本人の 女性で、欧州7ヵ国に1980年1月以降 6ヵ月以上(イギリス・フラン スは1日以上)滞在したことが明らかになった女性は、提供者から 除外している。

さらに、「加水分解でプリオンの不活化・除去ができるというデータが得られるか、プリオンの検査法が開発されるまで」は、予防的対策としてプラセンタエキス注射剤使用者の「献血を制限する」としている。

製薬過程の加水分解で蛋白がアミノ酸に変わることが立証されるか、またはプリオンの検査法が開発されれば、この予防的対策は解除されるということであるので、プラセンタ注射液の製造メーカーは、積極的に加水分解でプリオンの不活化・除去ができるというデータの提出に努めてほしい。

参考までに特定生物由来製品の「処理法」 に応じた「献血への影響」を一覧表にまとめ た(図12)。

すなわち輸血製剤や移植臓器は非加熱なので受益者の献血は当然禁止である。血液凝固因子の投与を受けている者は、加熱製剤であっても、もともと血液疾患があるため献血が禁止である。一方、加熱製剤の血清アルブミン、免疫グロブリンの投与を受けた者は、3~6ヵ月経過すれば献血は可能である。

特定生物由来製品の処理法と献血

	加熱	加水分解	献血
輸血製剤	非加熱	_	禁止
移植臓器	非加熱	_	禁止
血液凝固因子	加熱	_	禁止
血清アルブミン	加熱	-	3ヶ月
免疫グロブリン	加熱	_	3~6ヶ月
胎盤製剤	加熱	加水分解	当面制限

図 12

それに比して胎盤製剤は、加熱だけでなく加水分解処理が加えられているにもかかわらず、「当面制限」である。

先に触れたように胎盤製剤は加熱血液製剤と同程度以下のリスクと考えられるので、少なくとも血清アルブミンと同等の制限に改めることを強く要望したい。

これがプラセンタの誤解を解くための最重要 課題であり、同時に献血人口の増加にも寄与で きると演者は考えている。

「エビデンスが全くない」という誤解

プラセンタ療法には「エビデンスが全くない」 という批判があるが、これも誤解だという反証 をいくつか示しておきたい。

当医学会の『研究要覧』(図13) にもエビデ



図 13

ンスに関わる論考 が多く載っている が、ラエンネック の製造元である日 本生物製剤では、 2014年度分として 16本の研究論文を 発表している(図 14)。

2014年度関連論文

(日本生物製剤ホームページより)

- 1. C Yoshikawa, F Takano, K Koike, et al: Effect of Porcine Placental Extract on Collagen Production in Human Skin Fibroblasts In Vitro.(ヒト皮膚線種芽細胞のコラーゲン産生に対するブタ胎盤抽出物の効果(In Vitro 1).: Gynecology & Obstetrics, 3(6), 1-4, 2013
- 2. V Llorca, T Lloret, J Ballesteros: Dermatological Diseases and Human Placental Extracts. Psoriasis Case Study in Europe. (皮膚疾患と上胎盤抽出物.ヨーロッパにおける乾癬症例): Approaches To Aging Control, 17, 91-97, 2013
- 3. 中山 伸朗:C型慢性肝炎に対するIFN治療の副作用対策.:Modern Physician, 34(4),429,2014
- 4. 新藤 隆行: 今ブラセンタ製剤を再考する一慢性肝障害疾患における新しい治療効果一.: 第119回日本解剖学会総会・全国学術集会講演プログラム・抄録集, p69, 2014
- 5. Y Hamada: New Era of Regulating Congenital Iron and Copper Metabolism Disorder by Laennec® (Hepcidin-containing Biological Drug Derived from Human-Placenta);

 Background/Purpose. (ヘブシジンを含むヒト胎盤を原料とした生物由来設制ラエンネックによって先天的な鉄および個代謝異常を調整する新しい時代 胃景/目的):アジア太平洋肝臓学会議
- Background/Purpose. (ヘブシジンを含むに片鉛壁を原料とした生物由来製料ラエンネックによって先天的な鉄および瞬代割異常を調整する新しい時代 胃愛(目的):アジア太平洋料展子会! (APASL), 2014 6. Y Hamada: Laennec® Derived from Human-Placenta Improves NASH and Chronic Henatitis Type C through Normalizing Iron Metabolism by the Action of Hencidin – 2nd Report:
- 6. Y Hamada: Laennec® Derived from Human-Placenta Improves IAASH and Chronic Hepatitis Type C through Normalizing Iron Metabolism by the Action of Hepcidin 2nd Report; Background/Aims. (ヒト胎盤に由来するラエンネックはヘブシジンの作用によって鉄代謝を正常化し、それによりNASHとC監慢性肝炎を改善する-2次報告の背景/目的)::アジア太平洋肝臓学会議 (APASL), 2014
- 7. ① 吉田 淑子:ブラセンタ(胎盤および胎盤周囲組織)はアンチェイジングにも再生医療にも有効. 第14回日本抗加齢医学会総会 シンポジウム28, 2014
- ② 柴原 直利: ブラセンタの伝統医学的効能. 第14回日本抗加齢医学会総会 シンポジウム28-1, 2014
- ③ 吉田 淑子:羊膜(プランセンタ)は生活習慣病、アンチエイジングに有効!. 第14回日本抗加齢医学会総会 シンポジウム28-2, 2014
- ④ 岡部 素典, 吉田 淑子, 小池 千加, ほか: 羊膜を利用した再生医療はここまで進んでいる。第14回日本抗加齢医学会総会 シンポジウム28-3, 2014
- ⑤ 日比野 佐和子:再生医療の観点から考えたブラセンタ医療. 第14回日本抗加齢医学会総会 シンポジウム28-4, 2014
- 8. 日比野 佐和子: 日本におけるアンチエイジング診療の最前線(点滴療法、遺伝子検査から再生医療まで).: 第14回日本抗加齢医学会総会 How to Session 1, 2014
- 9. 上田 一得, 川合 智行, 総山 翔子, ほか: 犬猫に対する胎盤抽出物プラセンタの有効性について.:第53回日本伝統獣医学会大会 抄録集, 35, 2014
- 10. C Yoshikawa, F Takano, K Koike, et al: Efficacy of Porcine Placental Extract on Wrinkle Widths below the Eye in Climacteric Women. (ブタ胎盤抽出物の更年期女性における眼下のしか幅に対する効果). Climacteric, 17, 370-376, 2014
- 11. 松岡 賢也:高齢者に多い加齢疾患とプラセンタ.:漢方併用療法, 通巻 第66号, 1-6, 2014
- 12. A Yagi: Possible Efficacy of Aloe Vera Gel Metabolites in Long-Term Ingestion to Insulin Sensitivity. (アロエゲル代謝物質の長期的な摂取におけるインシュリン感受性に対する効果の可能性)::J. Gastroenterology and Hepatology Research, 3(3), 996-1005, 2014
- 13. Y Yamaguchi, D Deng, Y Sato, et al: Silicate Fiber-based 3D Cell Culture System for Anticancer Drug Screening. (抗癌剤-るい分けのためのシリカファイバーを基材とした3D細胞培養・表システム). Anticancer Research, 33:5301-5310, 2013 乗システム). Anticancer Research, 33:5301-5310, 2013 A. T Kolke, K Kokke, N Szuxid, et al: Efficacy of Porcine Piacental Extract on Shoulder Stiffness in Climacteric and Postmenopausal Women with Hormone Therapy, (更年期および開
- 15. K Kolke, K Sugjura, N Suzuki, Efficacy of Porcine Placental Extract on Climacteric Symptoms in Peri- and Post-menopausal Women. (開稿前後の女性における形というなど、 K Kolke, K Sugjura, N Suzuki Efficacy of Porcine Placental Extract on Climacteric Symptoms in Peri- and Post-menopausal Women. (開稿前後の女性における更年開度状に対する
- ブタ胎盤抽出物の効果).: Int Menopause Society, 2014 16. 土田 健一, 三澤 和史, 種田 紳二ほか:ラエンネックによる糖尿病合併遺伝性ヘモクトマトーシス患者に対する鉄代謝異常の治療. :糖尿病, 57(3), 223, 2014

臟 15条3号 (1974)

二重盲検による CE-14 の慢性肝疾患に対する効果

上田	英雄	奥村	英正	堀口	正晴	浪久	利彦
斧田:	大公望	岩村包	建一郎	上野	幸久	奥田	邦雄
大森	亮雅	小林	節雄	酒井	和夫	滝野	辰郎
土屋	雅春	橋本	修治	広重奏	第一郎	矢野	幹夫
山水	98						

限旨:冷료人胎盤の加水分解によるCEI4 (ワエンネック (L)) は各種アミノ酸を含んでおり、 その作用として、抗難肝作用、組織呼吸の促進効果、肝再生の促進などが、実験的研究から知 られている。今回の研究は、本助が慢性所体患の信能に有効な薬剤かどうかを知ることであっ 。患者を一直解検により、2部にクランダムに分けた。Placeboとしては生態的食塩水を用いた。 第1 群は、Liz時を2週間見せらプメルに分けた。Placeboとで、この方法をもう一度くり返した。 第1 群は、Liz時を2週間見せらずた後、Placeboとで、この方法をもう一度くり返した。 部1 群は、Liz時を2週間受けって必の支温にの理解を自分けた。その能と2週後の値と比較し た。同暦とも、GOT、GPTは1を分間で下降し、それは統計的に有であった。これにして、 、同時のPlacebo間間におけるGOT、GPTの下降は有意ではなかった。以上により、Liz後 が経路の用を少な無効ねとというに

性肝疾患患者に効果があるといえよう。 索引用語:二重盲検 cross over 方式 慢性肝炎 肝硬変 胎盤製剤

1993年, V. P. Filatov¹⁾ らは、冷蔵人胎盤を皮下に 理没することにより、瘢痕収縮や胃潰瘍の治療に有効で

期没することにより、報覧は総や円清報の治療に有効で ある。と報告によいで、特別は人能性質の呼吸走治療への応用 を対決、その有効がわらることを示したが、人能性質 を加水分解して、それを製造化したものがCEH (ラエ シネック)である。その基礎的時代や門については、 利田により、An approach to the treatment of liver cir-nosis and spontaneous gangers (1988、医学者整役 行)なるよにまとめられている。その後、いくつかの臨 本種類の用力であるが、これもいずれも現在の効 素質点の認識からみるとボード少なものである。 刊定の名画からみるとヤーガなものである。 今回われわれは、本剤の慢性肝疾患に対する効果を確

かめるため、二重盲検による cross over 方式により下記 のごとき方法により効果判定を行ない、有効との成績を

なお本研究は、下記のごとき研究担当者 (五十音順)

および医療機関の協力により行なわれた。 岩村機一郎 東京医科大学第一内科 上野幸久 国家公務員共済組合連合会三宿病院内科 奥田邦雄 千葉大学第一内科 千葉大学第一内科 日本医科大学第一内科 日本医科大学第一内科 读章·前院内科 群馬大学第一内科 市立-鄭莉院内科 京都府立医科大学第三内科 慶応義塾大学内科 順天蒙大学消化内科 東田島士学第二内科 橋本修治 鹿児島大学第二内科

係不停面 處光局人子第二內件 広畫畫一郎 福岡県济生会福岡総合桐院内科 堀日正晴 東京總惠会医科大学第三病院消化器内科 矢野幹夫 松山赤十字桐院内科 山本 繁 佐々木研究所附属杏雲堂病院内科

Medication and Treatment Vol.9 No. 3 Mar-81

Table 5-1 Overall improvement rate after 4th supply

	Very effective	Effective	Slightly effective	Not effective	Getting worse	Total	+ Effective
Melsmon	4	8	6	12	1	31	12
	(12.9)	(25.8)	(19.4)	(38.7)	(3.2)	(100)	(38.7)
Placebo	0	4 (16.7)	3 (12.5)	13 (54.1)	4 (16.7)	24 (100)	4 (16.7
Total	4	12	9	25	5	55	16

Table 5-2 Overall improvement rate after 2 weeks supply

Very effective	Effective	Slightly effective	Not effective	Getting worse	Total	Very effective + Effective
15 (48.4)	9 (29.0)	(9.7)	4 (12.9)	0	31 (100)	24 (77.4)
4 (16.7)	2 (8.3)	4 (16.7)	13 (54.1)	1 (4.2)	24 (100)	6 (25.0)
19	11	7	17	1	55	30
	15 (48.4) 4 (16.7)	15 9 (48.4) (29.0) 4 2 (16.7) (8.3)	effective	effective Effective effective effective 15 9 3 4 (48.4) (29.0) (9.7) (12.9) 4 2 4 13 (16.7) (8.3) (16.7) (54.1)	effective Ellictive effective effective wore 15 9 3 4 0 (48.4) (29.0) (9.7) (12.9) 0 4 2 4 13 1 (16.7) (8.3) (16.7) (34.1) (4.2)	effective Littlective effective effective effective cffective worse Total 15 9 3 4 0 31 (48.4) (29.0) (9.7) (12.9) (100) 4 2 4 13 1 24 (16.7) (3.3) (16.7) (54.1) (4.2) (100)

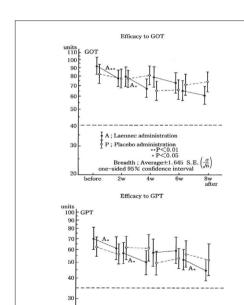
Table 6-1 Mental symptom improvement rate after 4th supply

	Very effective	Effective	Slightly effective	Not effective	Getting worse	Total	+ Effective
	5	4	8	13	1	31	9
Melsmon	(16.1)	(12.9)	(25.8)	(41.9)	(3.3)	(100)	(29.0)
Placebo	0	2 (8.3)	2 (8.3)	13 (54.2)	7 (29.2)	24 (100)	2 (8.3)
Total	5	6	10	26	8	55	11

Table 6-2 Mental symptom improvement rate after 2 weeks supply

	Very effective	Effective	Slightly effective	Not effective	Getting worse	Total	+ Effective
Melsmon	12	9	5	5	0	31	21
vicismon	(38.8)	(29.0)	(16.1)	(16.1)		(100)	(67.8)
Placebo	(8.3)	4 (16.7)	4 (16.7)	12 (50.0)	2 (8.3)	24 (100)	6 (25.0)
Total	14	13	9	17	2	55	27

図 15



Summary of drug-efficacy [(A)Items having a tendency to decrease or increase significantly by Laennec]

Examination-items	Before~2w	2w~4w	4w∼6w	6w~8w
O GOT	**	*		
O GPT	*	*		*
Al-P	*			
O TTT				**
O ZTT	*			
LDH				(cf.) *
O T-chol				(cf.) * (I)

* Significant under 1% level,

* Significant under 5% level,

(1) to increase significantly, Nothing is (cf.) to have a tendency inside of normal

Calculated logarithmically

Calculated by original-value

Method: t-Test (II) of the related samples

[薬効再評価資料]

Summary of drug-efficacy [(B)Items having a tendency to decrease or increase significantly by Placebo]

Examination-items	Before~2w	$2w\sim4w$	4w∼6w	6w∼8w
O AI-P		*		
• LDH	(cf.) *			
O A/G	*			
O Albumin		*(I)		
Ο γ-globulin				**(I)

Significant under 1% level,

** Significant under 1% level,
Significant under 5% level,
(1) to increase significantly, Nothing is to decrease,
(cf) to have a tendency inside of normal range.

Calculated logarithmically
Calculated by original-value
Method: t-Test(II) of the related samples

〔薬効再評価資料〕

図 16

また、上掲の図15は、二重盲検試験の結果を報告した論文、 図16 は肝疾患に対するラエンネックの試験結果であるが、GOT・ GPT が有意に 下がっているこ とが示されてい る。

さらに、右に 示した図17は、 韓国女性の更年 期障害に関する 二重盲検試験の 研究論文の抄録 (Kong MHSK よる)である。 試験の結果、

Menopause, 2008 Mar-Apr;15(2):296-303.

Effect of human placental extract on menopausal symptoms, fatigue, and risk factors for cardiovascular disease in middle-aged Korean women.

Kong MH1, Lee EJ, Lee SY, Cho SJ, Hong YS, Park SB

Author information

OBJECTIVE: In Korea, human placental extract (HPE) has recently been used to treat various diseases (chronic liver diseases, menopause syndrome, chronic fatigue, skin pigment diseases, etc.), but evidence-based studies are not yet sufficient. The aim of this study was to examine the effects of HPE on menopausal symptoms, fatigue, and risk factors for cardiovascular disease in middle-aged Korean women in a randomized controlled trial

DESIGN: Korean women, aded 40 to 64 years, with menopausal symptoms and fatigue were recruited as participants. The women were randomly assigned to a placebo group or an HPE group. The HPE group received subcutaneous injections of HPE in the abdomen for 8 weeks, whereas the placebo group received normal saline. Then, the Menopause Rating Scale, and Fatigue Severity Scale, and Visual Analog Scale were administered, and risk factors for cardiovascular disease were assessed.

RESULTS: The Menopause Rating Scale total baseline score was not different between the two groups; however, the score of the HPE group decreased significantly at 8 weeks compared with that of the placebo group (P = 0.033). Fatigue Severity Scale and Visual Analog Scale scores of the placebo group did not change, whereas the scores of the HPE group decreased significantly during the study period (Fatigue Severity Scale, P = 0.002; Visual Analog Scale, P = 0.001). The baseline 17beta-estradiol level was not significantly different between the two groups, but the 17betaestradiol level of the HPE group was significantly increased at 8 weeks compared with that of the placebo group (P = 0.031). No changes in risk factors for cardiovascular disease were observed in either group.

CONCLUSIONS: Menopausal symptoms and fatigue in middle-aged Korean women improved after 8 weeks of HPE treatment, whereas risk factors for cardiovascular disease did not change during the study period

「更年期スケー

図 17

ルーが改善した

ことなどが示されているが、注目すべきは注射群の17β-エストラ ジオール (E2) が上がっている (図中にアンダーラインを付した) ことである。

次に、過去5年間の「プラセンタ抽出物関連論文」を「PUB MED | で検索した結果を示した(図18)。

その中に1本だけあった日本の論文(松山友美、他)が、次ペー ジの図19である。

プラセンタ抽出物関連論文(PubMed 過去5年)

Protective effect of porcine placenta in a meno

著者名: Han NR. Park CL. Kim NR. Kim HY. Yoou MS. Nam SY, Moon PD, Jeong HJ, Kim HM

雑誌名: Reproducti

tential synergistic effects of human placental extract and minoxidil on hair growth-promoting activity in C57BL/6J

著者名: Kwon TR. Oh CT. Park HM, Han HJ, Ji HJ, Kim BJ

雜誌名: Clin Exp Dermatol

Anti-fatigue effects of porcine placenta and its amino acids in a behavioral test on mice.

雜誌名: Can J Physiol Pharmaco

Safety and toxicological evaluation of a novel, fermented, peptide-enriched, hydrolyzed swine placenta extract pov

著者名: Mitsui Y, Bagchi M, Marone PA, Moriyama H, Bagchi D

雜誌名: Toxicol Mech Method

Safety and toxicological evaluation of a novel, fermented, peptide-enriched, hydrolyzed swine placenta extract powder.

著者名: Mitsui Y, Bagchi M, Marone PA, Moriyama H, Bagchi D

雑誌名: Toxicol Mech Methods

-fetoprotein, identified as a novel marker for the antioxidant effect of placental extract, exhibits synergistic antioxidant activity in the presence of estradiol.

著者名: Choi HY, Kim SW, Kim B, Lee HN, Kim SJ, Song M, Kim S, Kim J, Kim YB, Kim JH, Cho SG

雑誌名: PLoS One

ne placenta mitigates protein-energy malnutrition-induced fatig

著者名: Han NR, Kim KY, Kim MJ, Kim MH, Kim HM, Jeong HJ

雑誌名: Nutrition

Ubiquitin-like protein from human placental extract exhibits collag

著名: De D. Datta Chakraborty P. Mitra J. Sharma K, Mandal S, Das A, Chakrabarti S, Bhattacharyya D

[Effect of human placental extract on proliferation of human umbilical cord blood CD34(+) cells in vitro].

養者名: Ma K. Yao H. Zhang M. Guo JJ. Cheng L. Li JH. Liu ZJ

雜誌名: Zhongguo Shi Yan Xue Ye Xue Za Zhi

etress in ovarientomized mine

著者名: Takuma K, Mizoguchi H, Funstsu Y, Kitahara Y, Ibi D, Kamei H, Matsuda T, Koike K, Inoue M, Nagai T, Yamada K 辦默名: J Pharmacol Sci

著者名: Lee EJ, Kamli MR, Bhat AR, Pokharel S, Lee DM, Kim SH, Kim TI, Hong S, Choi I 賴誌名: In Vitro Cell Dev Biol Anim

[A case of reversible cerebral vasoconstriction syndrome (RCVS) triggered by human placenta extract].

雑誌名: Rinsho Shinkeigaku

著者名: Rozanova S, Cherkashina Y, Repina S, Rozanova K, Nardid O 雜誌名: Cell Mol Biol Lett

Anti-inflammatory and analgesic effects of human placenta extra

著者名: Lee KH. Kim TH. Lee WC. Kim SH. Lee SY, Lee SM

雜誌名: Nat Prod Res

Cow placents extract promotes murine hair growth through enhancing the insulin - like growth factor-1.

著者名: Zhang D, Lijuan G, Jingjie L, Zheng L, Wang C, Wang Z, Liu L, Mira L, Sung C

辦默名: Indian J Dermatol Regulation of trypsin activity by peptide fraction of an aqueous extract of human placenta used as wound healer.

著者名: De D, Chakraborty PD, Bhattacharyya D

ration in CCI4-injured liver rat model Placenta extract promote liver regen

著者名: Jung J, Lee HJ, Lee JM, Na KH, Hwang SG, Kim GJ

雑誌名: Int Immun

Topical application of porcine placenta extract inhibits the progression of experimental contact hyper

著者名: Jash A, Kwon HK, Sahoo A, Lee CG, So JS, Kim J, Oh YK, Kim YB, Im SH

雑誌名: J Ethnopharmacol

52:182

ヒト・プラセンタ・エキス投与と関連があると思われた reversible cerebral vasoconstriction syndrome (RCVS) の1例

松山 友美* 佐佐直理恵

要旨:店房は 44歳の女性である。44歳の3月上旬に更年期店業群の底状類和・美白効果を目的にヒト・プラセンタ・エキス度下落を2日に「副計ら間を受けた、加密DDF16日目に実施管機構開放が出現。第4・第6前日にも、現まの長さくなるような重しい関係が出現した。発動・項部便直はみとめず、前途、可感じても正常だった。 類部 MRA でお中大風動設と同時間大温数紙に分散状の多角性性等をよるから、第12前日に間底は河条、開路 MRA 再検で多発性脳血管狭窄はほぼ消失しており、reversible cerebral vasocons 木店側ではヒト・プラヤンタ・エキスにふくまれている女性ホルモンが RCVS の発症要因の一つと考えられた。

(臨床神経 2012:52:182-185) Key words: 可逆性脳血管攀絡症候群(reversible cerebral vasoconstriction syndrome: RCVS),雷鳴様頭箱,ヒト・ブラ センタ・エキス、女性ホルモン

*Corresponding author: 国家公務員共済組合連合会派の町病院神経内科(〒810-8339 福岡市中央区葬館3丁日5番27号) 国家公務員共済組合連合会派の町病院神経内科 (受付日: 2011年8月24日)

Reversible cerebral vasoconstriction syndrome (以下 RCVS)は突然発症する雷鳴様頭痛の再発,可逆性の多発性脳 血管學縮によって特徴づけられる11. 今まで Call-Fleming 症 鐵群, Benign angiopathy of the central nervous system, Pr nary thunderclan headache などと呼ばれていた!. 発症原因 ト1 ア新編、用の直接セトFKエルブタミンかど由続収線開油 として妊娠、出原国族およびエルゴタミンなど肌可収制関地 業剤などと関連するとされているが、最近女性ホルモンの歳 咳変化がRCVSの発症に重要であるとの報告があるこ。今頃、 私たちは更年期症候群の症状臓和・美白効果を目的としたヒ ト・プラセンタ・エキス投与後に RCVS を発症した1症倒 ト・プラセンタ・エキス を経験したので報告する.

症質:44歳、女性 主勝:くりかえす激しい頭痛 現在腰:33歳時高血圧、42歳時うつ時。 家鉄歴・生活窓・終記単項なし、 現病腰:44歳の3月初めごろよりヒト・ブラセンク・

キス皮下注を2日に1回、計6回を2週間で投与された。3 月中旬ごろ、初回投与から18日目(第1病日、月経周期第2 日)で生理が始まった翌日,子供の卒業式が終了して階段を降 りる時に突然頭を殴られ頭部全体を締め付けるような非拍動 りる時に突然風を殴っれ風心を許を奪めわけけるような寺出頭 性実績が出現した。順気・順吐はみとめなかったが、今まで終 験したことがない雷鳴様頭輪で立っていられず、他人に交え られ保健室に駆け込んだ。 高血圧 190/168mmHg をみとめ、 テロイド性抗炎症薬 (NSAIDS) を処方され帰宅した. NSAIDS の効果が乏しく痛みのピークは発症時であり、その 後は徐々に軽度改善をみとめるものの完全には消失はしな かった。第4歳日に左腿球の奥をえぐるような頭痛が出現し ふたたび近灰を受診、再度顕常 CT を施行するも異常をみと

ふたたび近れを受診。円度場尾でT を施行するも異常をみと めなかった、第6 前日にも両側眼球の奥をえぐるような敷し い頭痛が四現し当科受診。緊急入院となった。 入院時内科的所見:身長 148cm, 体重 57.5kg, 血圧 164/117 mmHg, 脈拍数 88/min, 整, 体温 37.0℃,その他異常をみと 神経学的所見:意識清明, 髄膜刺激微軟なく, その他特記事

項はなかった 入院時検査所見:検尿正常,血液,生化学的検査にも異常な

し、頭部 MRA (Fig. 1A~B) で左中大脳動脈と両側前大脳動 脈に分節状の多発性の脳血管狭窄がみられた

成にカルルシラルにつ場面は3次インパラスにた。 入院後軽異常がみられなかったことより、くも膜下出血は否定した。脳血管検索が単発的でなく多発性であることより脳

されたことである。このヒト・プラセンタ・エキスは更年額 されたことである。このピト・プラセンタ・ユキスは鬼年別 生候群・自律神経失調産の症状機和、老化防止や美白効果が あるとされ、とくに近年注目を浴びている。日本国内で健康保 険適応があるのはラエンネックとメルスモンの2種類である が、本産例はラエンネックの投与を受けていた。Kong 6.7は 韓国国内で販売されているラエンネックをランダムにしらべ た結果。微量であるが女性ホルモン(エストロゲン 94pg/ml. 朗単副療ホルモン FSH 28mH1/ml) がふくまれていると報告 脚巣刺動をキモンFSI 2をMUL/m)がよくまれていると構作 している。 不高程度 37 戸中区12 画部が変化 17 野球 17 型で 七型日に重要が始まっており、本価件の月採規即中生用的に エストロケンドトナタの脚削にとり、ブラセンタ・スキスの使りを 受けることで、やの中によくまれているエストロケンの上野により、能 エストロケンがさらに高いレベルに達したと考えられる。そ 68、月採用機等にエストロゲンの2000年度 2000年度 2000年 管壁線をおこ1. RCVSを発症したのではないかと考えられ 官事職をおこし、KUSVを発症したのではないかと考えられ た。確かに不症例は1年前から誘発因子の一つとされるSSRI を内限していたが、今回のエピソードまで同じ量をずっと内 服しており関連性は乏しいと思われるが、何らかの被合因子 として影響を与えた可能性は完全に否定できないと思われ

RCVS は多数の症例で良性な臨床経過をたどるが、症例に 血発作などの合併症もみられ、さらに死亡にいたるほどの重 位な合併症がおこる報告もある。本症例のように重節な害恥 加な合権派がおこる報告もある。本証例のように本現な市場 権頭務がくりかえし再発する時は RCVS を全額に置き、女性 ホルモンなと血管契縮関連物質の使用などの確認。 頭部 CT のみならず頭部 MRI・頭部 MRA などの検査をおこない。 管撃縮有無およびその合併症の有無などをふくめ臨床的に戯

よってはクモ膜下出血や脳内出血、痙攣、脳梗塞、一適性脳虚

密な経過観察が必要であると思われた なお本症側の要皆は第188回日本神経学会九州地方会で報告し . ※本論文に関連し. 関示すべき COI 状態にある企業. 組織. 団体

- 1) Ducros A. Boukobza M. Porcher R. et al. The clinical and radiological spectrum of reversible cerebral vasoconstric tion syndrome. A prospective series of 67 patients. Brain 2007:130:3091-3101
- 2007;320:391-3101.

 Soo Y, Singhal AB, Leung T, et al. Reversible cerebral vasoconstriction syndrome with posterior leucoencephalopathy after oral contraceptive pills. Cephalalgia 2010;30:
- Bouchard M, Verreault S, Gariepy JL, et al. Intra-arterial drome Headache 2009:49:142-145
- Gerretsen P. Kern RZ. Reversible cerebral vasoconstrict
- cerebral vasoconstriction syndrome associated with hormone therapy for intrauterine insemination. Cephalalgia 2010;30:1127-1132.
- 6) 蘇 洋美 内山真一郎 宿難と非単からみたエストロロゲ COMME DAMEST SOCIAL
- ン展楼縣 日本版保 2005.65(suppl 35:597-60).
 Kong MH, Lee EJ, Lee SY, et al. Effect of human placental extract on menopausal symptoms, fatigue, and risk factors for cardiovascular disease in middle-aged Korean women. Menopause 2008;15:296-303.

図 19

この論文は、プラセンタ投与による RCVS (可逆性脳血管攣縮症 候群)の発症とエストロゲンの関係を検討したもので、先の韓国の 論文(図17)で示されたようにプラセンタから検出されるエスト ロゲンや FSH が、患者のエストロゲンを上げたのではないかと推 測している。

それに対しては、演者がプラセ ンタ製剤4Aにそれぞれ含まれて いる女性ホルモンを実測したデー タを示したい(図20)。

それぞれ2Aずつの測定結果で あるが、メルスモンに約90~100 pg/ml、ラエンネックに約30~ 40 pg/mlの「E2」が認められた。 その単位は「ピコグラム」である。 一方、表の欄外に示したように 血中エストラジオールの正常値 は、女性では「10~350pg/ml」(男 性は「20~60pg/ml」) であるので、 注射薬の1アンプル(2ml)には 女性の血液 1 ml程度のE2が含まれ

プラセンタアンプルに含まれるホルモンについて

製品名	製造番号	LH (IU/ml)	FSH(IU/ml)	E2(pg/ml)	プロゲステロン (ng/ml)
メルスモン①	15805	0.1未満	0.1未満	90.5	0.1以下
メルスモン②	15824	0.1未満	0.1未満	97	0.1以下
ラエンネック①	92134	0.1未満	0.1未満	33.1	0.1以下
ラエンネック②	567050	0.1未満	0.1未満	38.2	0.1以下

検査機関: BML総合研究所

エストラジオールの正常範囲 女性 10~350 pg/ml 男性 20~60pg/ml

図 20

ていたことになる。

これがどのような意味を持つかと言えば、更年期障害などに用いられる持続性卵胞ホルモン製剤である「プロギノン・デポー筋注」のエストラジオール吉草酸エステル含有量は1A当たり10mgで、100 pg の1 億倍となる。本剤4mgを筋注した際の最高血中濃度が約400pg/ml との報告があることを踏まえると、プラセンタ注射薬中の100 pg 程度のエストラジオールが体調に影響するとは到底考えられないのである。

これに関連する興味深い例として、当 院での症例も示しておきたい(図21)。

これは本年(2015年)2月から、更年 期障害で近医にてプラセンタ(1アンプル)を毎日注射していた58歳の女性の 「子宮径」を示すエコー写真である。

10月に来院して「生理が来た」ということで撮った写真が下の写真で、上左(2月)、上右(8月)に比べ、子宮が明らかに大きくなっており、内膜も肥厚が認められる。2月の血中エストロゲン値は、E2が16.0pg/ml、下垂体から分泌される卵胞刺激ホルモンであるFSHが56.9mIU/mlと明らかに更年期パターンであるが、

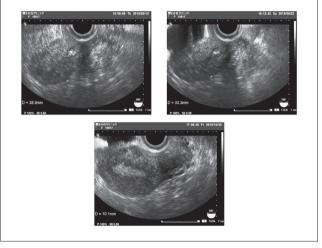


図 21

10月では E2: 24.8pg/ml、FSH: 16.2mIU/ml と、E2が増えたこと による negative feedback によりFSHが低下している。

これをどう考えるべきかだが、仮にプラセンタ注射液に含まれる 痕跡程度の量のエストロゲンが関係しているとすれば、注射回数に 応じて徐々に大きくなるはずであり、8月以降に急に大きくなった ことの説明がつかない。

一方、この女性患者は10月頃から体調が非常によくなったことを自覚している。プラセンタ注射により早発閉経が治癒して月経が戻ったり、閉経年齢が遅れることが、ときどき経験されることを考え合わせると、演者は、この女性患者の子宮が大きくなったこと、そして生理が来たのは、プラセンタ注射が全身を活性化したことにより、本人が元気になったために起こった変化であると考えるのである。

プラセンタの素晴らしさ

データ化できない治療効果を見る方法として、当院で行っている プラセンタ注射についての「自覚症状」に関するアンケートの結果

自覚症状の改善

(2015 響きの杜クリニック)

- 1回で1年振りに眠れた、全然違って本当にびつくりした。
- 手根幹症候群が劇的に改善した。
- あれほど痛かった腰が歩いてもいたくない。
- 汗の方も回数が減ってきた。4回ぐらいだが汗の量が全然違う。
- 1週間たってから汗の量が減ったが、寝汗がなくなって、ここ1週間ぐらいが良い。立ち仕事朝から晩、疲れづらくなった。
- 体調はいい。白髪が伸びるのが遅くなった。寝起き、肌つやが良い。
- 久し振りに月経が来た。月経前1週間前から疲れ、鬱が良かった。
- プラでは眠れるようになった潤いが出た。めまいも良かったが完全に良くなった
- 必ず春秋に出ていた咳喘息が今年は出なかった
- とっても調子が良い。お陰さまで、どこが痛いことはない。皆に若いといわれる
- 皆に元気だと言われる。 関節も痛くないし、打ってると全然違います。
- * すごい調子いいです。
- 時々頭を支えるのが辛いぐらい方や首が凝っていた。このままずっとこの状態が続くのかと思っていたが、ここに来てこんなに短時間で楽になった。ここに来るのに2年もかかったが、もっと早く来ればよかった。
- ツボ注2A 気持ちが落ち込まなくなったのが一番楽と
- 寝汗止まった。ばりばり元気
- プラセンタを打ってすぐに元気すぎて、2時間もツルハシで氷割り出した。エネルギーが余ってしまって止まらない。3日でエネルギーが切れてきた。
- 膝ツポ2A 膝の痛みはかなり良くなった。かなり効くものでびっくりした。気がついたら普通に歩いていた。
- プラセンタ遣ってから、卵胞発育がいい。採卵しなくても2個排卵した。
- 月経が凄く順調になった。月経痛が楽になった。
- 全身の肌の調子がとてもよい。打った日すぐに現れる。友達に何使っていると言われる、
- 常に、常に、常にあった具合の悪さが、プラセンタをしてあれ?と思うほど良くなった。
- 苦痛の日々がなくなった。振り返ると一ヶ月具合が悪くないことがわかる。毎日の生活の中で具合が悪くなることがないことがすごくありがたい。
- もっと早くすればよかった。
- 3回目とても効いていて怖いくらい。視界が明るく気持ちが引き上げられる。筋肉がついたように体が動く。

図 22

を示しておきたい(図22)。

「1回で1年ぶりに眠れた」「手根管症候群が劇的に改善」「あれほど痛かった腰が痛くない」「エネルギーが余ってじっとしていられない」というような、いずれも「劇的」と言えるほどの効果が記されている。

不妊症で通院している女性の例では、プラセンタ注射の後は卵胞の発育がよく、採卵しなくとも自然に排卵している。こういう結果はエストロゲンを定期的に使ってもなかなか生じないことなので、プラセンタ注射が卵巣機能を調整していると見るべきであろう。

(編集部註:ここで「手根管症候群」のステロイド治療を他院で受けたが、手の腫れと痛みが全く治らなかった女性患者が、プラセンタのツボ注射で劇的に改善したという体験談がビデオで映写された。スペースの都合で割愛する。)

「プラセンタはなぜ効く?」に答える

使えば有効性は明らかでありながら、その理由となると説明しにくいプラセンタの「効く理由」について、演者が患者さんに話している 一例を参考までに述べておきたい。例えばウミガメ(図23)は卵



図 23



図 24

をたくさん産むが、それでも生き残 るのはごく僅かで、非常に非効率的 で不安定な子孫の残し方をしている。

一方、哺乳動物は数少ない胎児を 子宮内で一定の大きさに育ててから 娩出するが、原始的な哺乳動物で ある有袋類 (例えばカンガルー:図 24~図27) の場合を見てみたい。

カンガルーは体内(図25)に子宮 が二つあり、牡のペニスの先は二つ に分かれているそうである。そこで 受胎すると、間もなく胎児を小さい まま娩出し、袋(育児嚢)の中で育 てる。有袋類は胎盤がないので、体 長2cm足らずの小さな状態で娩出さ

れた胎児は、膣口から袋の入口までよじ登り(図26)、辿り着いた

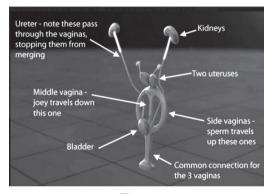


図 25

袋の中の乳首に吸い付いて成長していく(図 27)。つまり乳首が胎盤に相当している。

しかし有袋類では、妊娠初期に体外に出な ければならないという大きなリスクがある。 そのため哺乳類(正獣類)は、進化の過程で 妊娠初期に受精卵の一部が胎盤になり、子宮 の内面から成長に必要な栄養など全てを摂り 入れるという仕組みをつくったわけで、胎盤 は「赤ちゃんの一部」なのである。

一方、子宮の中で胎児を大きく育てること は、出産で母体が体力を大きく消耗してしま う欠点があり、出産直後に肉食獣に襲われた り育児に支障が出る可能性がある。そのため 胎児は、娩出される胎盤をその場で母体に食





図 26

図 27

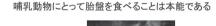








図 28

べてもらうことでこの問題を解決したのである(前ページ図 28)。

このように、胎盤は哺乳動物が進化の過程で作り出したものであり、妊娠中は胎児に、出産後は母体に働くという効率的に仕組まれたメカニズムには驚嘆の念を持たざるを得ない。人類も以前はこのような命の循環の中で胎盤を食していたものと思われるが、出産後の栄養摂取が良好になり、この習慣が失われたものと考えられる。

近年はこうした事実を知った妊婦の間で、胎盤 を食べるというケースがよく見られるようになっ

図 29

最近は出産後自分の胎盤を食べる妊婦が増えてきた

てきている。図 29 は生の胎盤を生姜醤油で食べる例で「ささみ」 に似た美味しさだそうだが、シチュウにすると食べやすいようであ る。

このように見てくると、プラセンタが自然界における種の保存という「命の循環」に組み込まれているからこそ、われわれ人間にとっても副作用のない貴重な薬剤になり得るということが理解できるのではなかろうか。

「作用機序が不明だから"非科学的"だ」という批判に対しては、「命の循環」という大きな事実を提示したい。まだ解明されない部分は残されているが、そもそも「科学は自然界を観察する作業の中で法則を見出してきた」ということを思い出していただきたいのである。

[編集部註:以下、「胎盤の作用機序についての一考察」「パッチフラワー療法」の項は割愛しました。 全体は『日本胎盤臨床医学会 研究要覧 第 17 号』をご覧ください〕